

## 設立趣旨書

### 《趣旨》

「子どもたちの笑顔ほど私たちに未来への希望と幸せを感じさせるものはない」これに異を唱える人はいないでしょう。なぜ私たちはその笑顔に心満たされる思いがするのでしょうか。

連綿として続いていく人間の営み、親ひいては先人たちから受け継いできたその営みの総体を子どもたちに引き継いでいく。限られた生しか持たない存在である私たちは、その営みのなかに滔々たる大河の流れにも似た、悠久の時間と人間の未来への希望を感じるのでしょうか。

「でき得る限り最良の教育に接する場を子どもたちのために設けたい。そこに集う人みんな教育の理想について話し合い実践していきたい」そんな思いから私たちはこの法人を発足させます。

「学校とはすでにそこにあり、子どもを通わせるもの」私たちは、学校のもつそんなイメージからまず自由になりたいと考えます。そこに集うすべての人が話しあい、感じあい、響きあうなかで成長していく場、それこそが教育の場としての学校のあるべき姿ではないのでしょうか。与えられる教育から提案し実践していく教育へ。さらにその前提として、教育とはなによりもまず自己教育＝自らの在りかたを考え、見つめ直し、変えていくことであるととらえたいのです。

その自己教育の拠りどころを私たちはドイツの哲学者、ルドルフ・シュタイナーに求めます。

シュタイナーは自らの教育の理想を「教育芸術」という言葉で表しました。何かを表現しよう、ひととつながろうとして内面からほとぼしりする意志。ひとやものとのふれあい響きあいから生じる共感。自分の感動や思い、世界の美しさをひとと共有するための論理や表現形式。芸術とはこの「意志・感情・思考」の三つが相俟ってこそ生みだされるものです。そしてこれら三者をバランスよくあわせ持つ全人的な人間を育むことこそ、シュタイナーが「教育芸術」という言葉で言いあてようとしたものなのでしょう。

さらにシュタイナーは「意志・感情・思考」の発達する時期をそれぞれ三つの段階に分けています。主に意志の発達する1歳から7歳、主に感情の発達する7歳から14歳、主に思考の発達する14歳から21歳。学齢期の子どもたちは感情が発達する時期にあたり、生き生きとした心をもって世界とふれあうことが何より大切です。そんな時期に知識の詰め込みのみに終始することは有害ですらある、とシュタイナーは述べています。

知育のみにとどまることなく、手や足、体を通して魂にまでとどくような豊かな体験を子どもたちにしてほしい、私たちは心からそう願います。

子どもたちの全人的な成長をなによりも願う。そのために親、教師のすべてが考え、話しあい、共感しあい反発しあいながらもひとつのことを意志していく。そしてその過程を通してすべてのひとが全人として成長していく。そんなことを可能にするひとびとの集まり＝新たなるコミュニティーの創設を私たちは目指します。

ともに集う人すべてが花ひらくところ、地域社会の中核として誰にでも開かれたところ。そんな場としての学校を皆の力で築き上げ、子どもたちひとりひとりを皆で大切に育ていく。さらにおのおのの欲する様々な活動もまた、その場において自由に実践していく。私たちはそのような意志を共有するものの集まりとしてこの法人を位置づけ、さらに多くのひとびとが私たちの考えに共鳴されともに歩んで行かれんことをここに願います。

#### 《申請に至るまでの経緯》

1994年 就学前の子どもを持つ母親を中心に、学校の設立を目指した集まり「シュタイナー学校設立を考える会」が始まる。シュタイナーの教育を学びながら、共感する仲間の輪を広げて行く。子どものためのオイリュトミー（舞踏の一種）を始める。

1995年 シュタイナー学校設立の準備段階として、1年生と2・3年生合同の2クラスを、「土曜クラス」と名付け市内公民館等でスタートさせる。会報「プラネッツ」を創刊。

1996年・1997年 各学年進級とともに新たに1年生を迎える。第1回年例祭。京田辺で教育講演会やオイリュトミー鑑賞会、教師と父母の有志によるクリスマス劇を始める。

1998年 1年生から5・6年生合同クラスまで全5クラス、約70名となる。会の名称を「京田辺シュタイナー学校設立準備会」を改める。2001年全日制シュタイナー学校の開校を会の目標に定める。

1999年 1年生から7年生まで全7クラス、約90名となる。全日制シュタイナー学校設立に向けた連続講演会をスタートさせる。NPO法人の獲得を会全体の意志として確認する。

平成11年10月17日

特定非営利活動法人京田辺シュタイナー学校

設立代表者 住所 京田辺市大住ヶ丘4-22-10

氏名 津吉 靖